



Data

監督・脚本：三谷幸喜
出演：中井貴一／ディーン・フジオカ／石田ゆり子／草刈正雄
／佐藤浩市／小池栄子／斉藤由貴／木村佳乃／吉田羊
／山口崇／田中圭／梶原善
／寺島進／藤本隆宏／迫田孝也／ROLLY／後藤淳平（ジャルジャル）／宮澤エマ／濱田龍臣／有働由美子

■■■ショートコメント■■■

◆内閣総理大臣・黒田啓介（中井貴一）が演説中に、有権者の1人から投げつけられた石が額に当たり記憶喪失に……。自分が総理だということすら憶えていないというから、大変だ。もっとも、彼の支持率は最低で、憲政史上最悪の総理大臣だったようだから、これを機会に退陣すれば、タイミングも良し。そういう考え方もあり、本人もその気のようにだが、常に総理の側に付き添っている怪しい（？）秘書官・井坂（ディーン・フジオカ）は、断固それを拒否。総理の記憶喪失は、当分の間絶対秘密に！それまで、何としてもこの危機を乗り切るハラを固めたが……。

◆三谷幸喜監督・脚本によるポリティカルコメディは面白そうだから、私の期待は大。しかし、近時の邦画のバカバカしさに失望している私は、なかなか見る気がしなかった。しかし、たまたま時間がうまく合ったため、やっと鑑賞する決心を。しかして、結果は大正解。

『笑の大学』（04年）『シネマ6』（249頁）ほどのインパクトはなかったが、中井貴一の真面目な熟演（？）を軸に、謎のフリーライター・古郡祐役の佐藤浩市や、熱い事務秘書官・番場のぞみ役の小池栄子等の達者な演技が相まって、十分楽しめ、かつ少しはホロリとさせられるコメディになっていた。もっとも、「悪徳」が取り柄だった黒田総理が、記憶喪失を契機として善人・一辺倒の総理として再出発するという物語は、あまりに単純。しかも、米国初の日系女性大統領スーザン・セントジェームス・ナリカワ（木村佳乃）が、「そんな総理を大絶賛！」とまでやれば、そりゃ、あまりにノー天気！まあ、映画だからいいようなものだが……。

◆総理のクビは軽いから、いつでも、誰にでも、すげ替えは可能。それが日本の政治。

実力者の官房長官・鶴丸大悟（草刈正雄）は、そう確信しているようだが、確かにそれもあり。しかし、総理が官房長官の脅しの前にオドオドしている姿を現実にはスクリーン上で観るのは、日本国民の1人としてやはりつらいものがある。

しかし、いつ、どのように記憶が回復したのかは知らないが、「しがらみのない政治」を取り戻そうと、真正面から再出発する黒田の姿は、バカバカしいと思いつつそれなりに感動的だ。最初にそれに同調したのは秘書の井坂だけだったが、次第に秘書室長も頑張っていくことに・・・。

◆古郡祐を演じた佐藤浩市の存在感はさすがだが、古郡は黒田のスキャンダルのみならず、政敵・鶴丸のスキャンダルをもすぐにキャッチしていくから、この国のリーダーたちのワキの甘さにビックリ。学校のホームルーム用の内閣ではなく、日本国憲法に基づく内閣なのだから、総理大臣や官房長官等、権力の中核はしっかりしなければ！

総理の浮気が重大なスキャンダルなら、総理夫人と秘書官長との不倫も大きなスキャンダル。それが暴露されたことによって総理に迷惑をかけた秘書官長の辞任は当然だが、さて、本作後半のストーリー展開は・・・？

スキャンダルにはスキャンダルで対抗！こちらが浮気や不倫なら、あの官房長官と黒社会との接点は・・・？そんな暴露合戦ではホントは困るのだが、正直な総理大臣の「ごめんなさい」が国民に対してうまく機能すれば、ひょっとして・・・？田中角栄元総理もしたたかだったが、ホントは正直者だったらしい黒田総理が、ラストになるにつれて見せるしたたかさにはしっかり注目したい。

◆『シネマ43』は、「第2章 ハリウッドの話題作」の中で、「大統領にまつわる映画」として、①『LBJ ケネディの意志を継いだ男』、②『フロントランナー』、③『華氏119』を掲載した。これはいずれも、現実をしっかりと見据えた問題提起作だった。また、『シネマ45』では、「第1章 報道のあり方と民主主義を考える」の中で「9.11テロをどう考える？」として、①『記者たち 衝撃と畏怖の真実』、②『バイス』を、「新聞記者、報道写真家のあり方は？」として、③『新聞記者』、④『プライベートウォー』を掲載した。これらもすべて、現実を見据えたうえでの問題提起作で、大いに考えさせられるものだった。

それに比べて、本作は単なる記憶喪失の総理大臣をテーマ（ネタ）にしたポリティカルコメディだが、あまりにくだらないTVドラマの延長のような原作モノや恋愛モノが氾濫している今の邦画界なら、その価値は十分・・・？

2019（令和元）年9月26日記